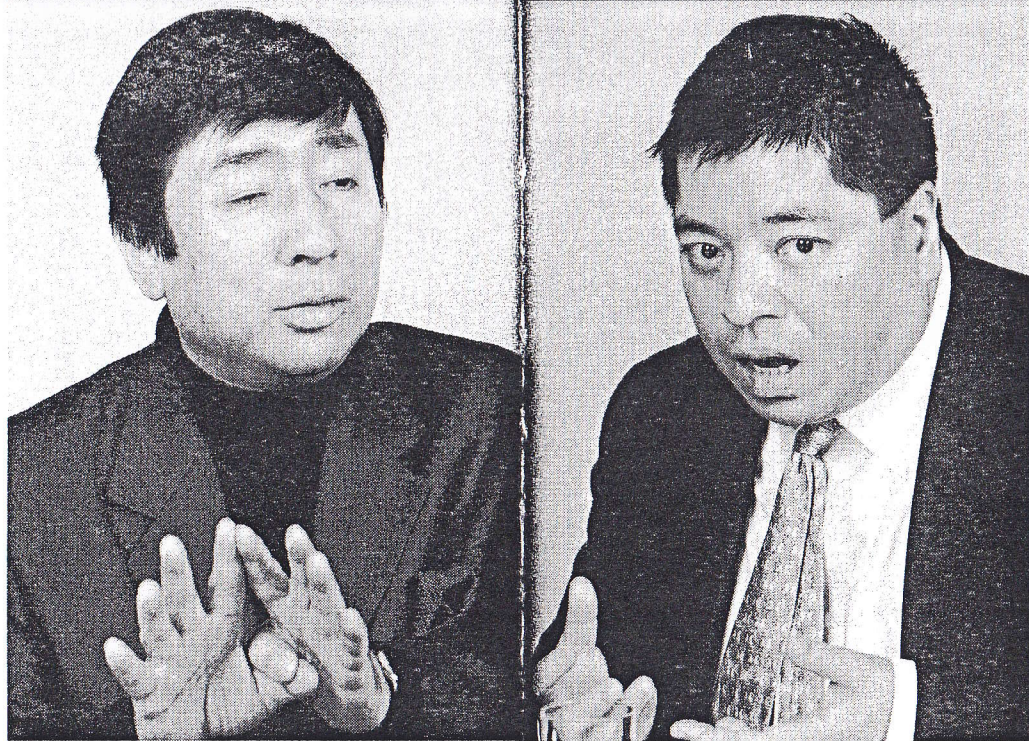


対談・佐藤 優／起訴休職外務事務官 × 手嶋 龍一／外交ジャーナリスト・作家

今そこにある ポロニウム拡散の危機

暗殺の真犯人はロシア政府ではなく、テロやマフィアとつながる武器密輸商の線が濃厚だ。この事件は、世界にも稀有な大量破壊兵器が闇の市場に出回っていることを仄めかす。北朝鮮やアルカイダにポロニウムを手渡すな



さとうまさる 英国の陸軍語学学校でロシア語を学び、その後、在ロシア日本大使館に勤務。モスクワ国立大学哲学部で弁証法神学を講義した。02年、背任と偽計業務妨害容疑で逮捕され、現在起訴休職中。この逮捕劇を「国策捜査」として糾弾した『国家の罠』が話題に。近著に『獄中記』。

てしまりゅういち 外交ジャーナリスト・作家。97年から2005年までNHKワシントン支局長を務める。05年6月に独立し、上梓した小説『ウルトラ・ダラー』がベストセラーに。近著に『ライオンと蜘蛛の巣』のほか、佐藤優氏との対論を載せた『インテリジェンス 武器なき戦争』がある。

標的となった反プーチン派

手嶋 この暗殺事件は、事実が一つ明らかになれば、また一つ謎が深まるという奇怪な事件です。スパイ・ミステリーにもこれほどの素材はそうあるものではない。まず、事件の概要を押さえておきましょう。旧ソ連諜報機関「国家保安委員会（KGB）」の後継機関であるロシア連邦保安局（FSB）元中佐のアレクサンドル・リトビネン

ています。その後、体調不良を訴えて入院し、死亡した。二人の死に関連はあると見立てていますか。

佐藤 まず、ポリトコフスカヤさんですが、彼女は、チェチェンの独立派に非常に近いと同時に、突撃型でマフィアを取材するジャーナリストとしては第一級の人物でした。主要なチェチェン・マフィアの組長らの動向をきちんと取材できる特殊な立場にいて、非常に目立つ存在だった。また、彼女の活躍している新聞は、ゴルバチョフ元ソ連大統領がスポンサーとなっているという一種、特殊な媒体でした。

ただ、彼女のような人がいることはロシア政権にとってはプラスだったはず。彼女は、ロシア国内ではそれほどに影響のある人物ではない。プーチン政権を「ヒトラーと同じだ」とまで罵詈雑言を浴びせかけてもなお、政権は媒体を潰していないし、損害賠償訴訟なども起こしていない。FSB、SVR（対外諜報庁）は、むしろ彼女

コ氏が昨年の秋不審な死を遂げ、彼の尿から放射性物質「ポロニウム210」が検出されました。

彼が毒殺される直前の十月には、プーチンの対チェチェン政策を批判し続けていた女性ジャーナリスト、アンナ・ポリトコフスカヤさんが、モスクワ市内の自宅アパートで何者かによって射殺されています。そして、リトビネンコ氏は、ポリトコフスカヤさんの暗殺の背景を熱心に追っていました。

彼女が亡くなったことがすべての発端です。

まさにその彼女の死をめぐる、リトビネンコ氏はイタリヤからやってきたマリオ・スカラメラと、後にポロニウムが検出されることになるロンドンの寿司バー「イツ」で会食しました。リトビネンコ氏はこの会食の数時間後には、アンドレイ・ルゴボイ氏とドイツから来たドミトリー・コフツンという二人のロシア人ビジネスマンに会っ

を「ロシアには報道の自由がある」というPRに使っていました。

手嶋 佐藤ラスプーチン流の推理は、「誰が得をするのか」でした。彼女にロシア当局が手をかけたとするのは、あまりに短絡的に過ぎて、プーチン政権の得にはならない。

佐藤 ロシア政府にとって、世界中の批判を招いて損することはあっても得はしないでしょう。結論から言えば、わたしはリトビネンコ氏の暗殺も、政府当局が手をかけたという見方はあまりにも単純に過ぎると思います。

手嶋 リトビネンコ氏も謎に包まれた人物です。本当は、どういった人物だったと考えていますか

佐藤 リトビネンコ氏がなぜ、キーパーソンとして注目されるか。これを説明するためには、彼ときわめて密接な関係にあったロシアの政商ボリス・ベレゾフスキー氏について説明する必要がありますでしょう。彼は、ファクス機器や車の販売で、巨万の富を作り、エリ

爆破事件は、実はチェチェン武装勢力の仕業ではなく、ロシアFSBの自作自演だったと書いています。この内容は、その筋の世界では、「事実ではない」ということになっているのですが、ともかく彼が、反プーチン派の代表格のベレゾフスキー氏と共に、プーチン政権のチェチェン政策を相当 声高に批判していたのは事実です。

ポロニウムに被曝し、死亡した元FSB中のリトビネンコ氏（AFP時事）



殺害されたリトコフスカヤさん（共同）

ツイン政権の中核に食い込みました。その上、ロシア安全保障会議副書記に就任し、チェチェン問題を担当したという経歴の持ち主です。その後はプーチン大統領を支持し、またも政権の中核に食い込むはずだったんです。ところが、彼は気が利きすぎる。小技をきかせすぎる。どうもこれがプーチンの癪に障ったようなのです。

まもなくプーチン大統領は、ベレゾフスキー氏の財力をバックにした強大な影響力を削ぎにかかった。ベレゾフスキー氏は、公共放送ORTや航空会社エアフロートの筆頭株主だったけ

国家の仕業ではない
だからこそ、恐ろしい

手嶋 ポリトコフスカヤ、ベレゾフスキー、リトビネンコ。一連の事件の延長線上には、反プーチン派が登場します。彼らは一様にプーチンのチェチェン対策を批判している。そうすると、暗殺の黒幕はプーチン大統領、政府の情報機関や当局の意を受けた民間人が手をかけたと見るのが自然です。しかも、ポロニウム210は四〇億円もする、きわめて高価な物質です。致死量を手に入れるためには、核関連施設から持ち出すしかないといわれています。

これらの状況証拠から見ても、ロシア政府による暗殺ではないか——と仄めかす報道も少なくなかった。ただ、これでは、あまりにも犯人像が明々白々としすぎる。そう、佐藤ラスプーチンも見立てているのです。

佐藤 確かに、ロシア政府には伝統的に毒を盛るという暴力体質があります。

れど、この株を取り上げたんです。その上、最高検察庁は、エアフロート資金の横領疑惑などでベレゾフスキー氏を追及し始める。ベレゾフスキー氏はイギリスに逃げざるを得なかった。

しかし、イギリス亡命中であっても、かつて培ったチェチェン、ロシア内の反体制派に広く人脈を持ち、いまだに影響力の強い人物であることに変わりはありません。チェチェン・マフィアともきわめて濃いつながりを持っている。今、プーチンと本格的に戦うことのできる人物といえば、ベレゾフスキー氏がナンバーワンといっている。

手嶋 リトビネンコ氏は、そのベレゾフスキー氏の庇護下において、金銭的にも支援を受けていた。ロンドンの家も彼の持ち物でした。

佐藤 そうです。リトビネンコ氏は、ベレゾフスキー氏の支援のもと、ロシア政府を批判する本を出版しています。この本は、九九年、モスクワのアパートで三〇〇人以上が死亡した連続テロ

以前、わたしが在ソ連日本大使館員だった頃にも、ソ連当局側の警告を受け入れず、しびれ薬を盛られた経験もありますから。（笑）

手嶋 私もラスプーチンと対談などしている身ですから、十分に気を付けなければ（笑）。毒薬は一服盛られると脅しの効き目はかなりのものでしょう。佐藤 ええ。面白いもので、同じことをしようとしたときに、毒で苦しんだことを体が思い出してでなくなるんです。効果絶大です。（笑）

ともかく、インテリジェンスの世界で国家の暗殺といえば、主な手段は交通事故か自殺です。中東や東南アジアにおびき出して交通事故死に見せかけてしまえば、ろくに事故を調査されることもない。ところが、ポロニウムなどというおよそ素人では手に入らないような武器を使えば、まず、国家が疑われる。こんなやり方では、ロシアの暴力体質を世界にPRするようなものです。得策とはいえない。だから、国

家の仕業ではないと考えます。

だからこそ、私が恐れるのは、犯人のポロニウムの手経路なのです。乱暴なことを言えば、国家による犯罪なら、まあ、安心なのです。国家が標的の人物を始末するためにのみ使用するのだから、管理はしっかりしている。むやみやたらに流出する危険はありません。しかし、武器の密売ルートに乗ってこれだけ恐ろしい大量破壊兵器が「民間のマーケット」に出回っている」とすれば、これは放置できない。

手嶋 今回の事件の本質は、その一点にあると言ってもいい。核管理のほころびを示すものか否か、これこそが核心です。ポロニウムの出所はロシアと見ていますか。

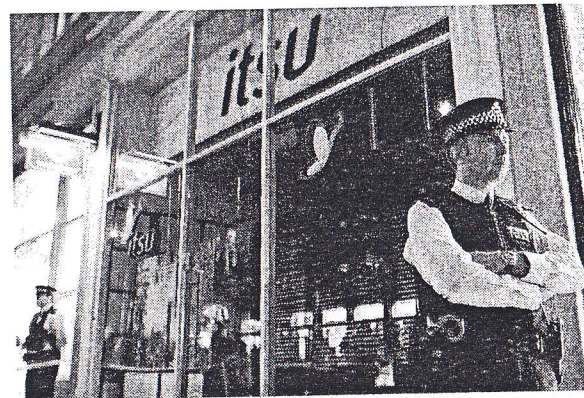
佐藤 ロシアであることを否定する材料はありません。不思議なことに今、ロシアでは、アメリカに対する報道が抑制されているんですよ。普通、こういった事件があれば、ロシアでは「アメリカにもポロニウムがある」という

こしたの、どんな組織だったと考えられるでしょうか。

佐藤 これを考える上で、リトビネンコ氏の葬儀がイスラム教であったことに注視すべきでしょう。たとえば、ソ連時代の武器商人は、ほとんどがイスラム教徒でした。イスラム世界の人間と武器をやり取りする際に武器の値段が違ってくるからです。

ちなみに、リトビネンコ氏のような亡命者がロンドンにある寿司バーに出入りするには、四五〇〇万〜五〇〇〇万円の年収が必要になる。このことを押さえておく必要があります。

手嶋 ここからは、私の専門分野です(笑)。リトビネンコ氏は、ロンドン市



ポロニウムが検出されたすしバー (AFP=時事)

報道があるものです。ところが、十一月二十七日付のロシア有力紙『イズベスチヤ』によると、「確かに、アメリカの研究機関などにもポロニウムはあるけれど、アメリカの国境線での管理は大変にしっかりしているので、アメリカから出ることはありえない」と報道している。こういう記事が出るという

うことは、ロシアは「まずいぞ。わが国が、旧ソ連の二カ国で構成する独立国家共同体(CIS)から出ている危険があるぞ」と思っているということですよ。プーチン政権は、事態の深刻さに気付いていると思います。

手嶋 日本のメディアはほとんど指摘しないのですが、この事件は、大量破壊兵器の拡散をどうすれば抑止できるかという問題として捉えたほうがいい。佐藤 おっしゃる通りです。不拡散とカウンタートロリズムの問題です。これだけ深刻な問題になってくると、今後、国際インテリジェンスのネットワークからも情報が出てくる危険が高くなる。大昔の苦むした東西冷戦の図式に当てはめて、東側が気に食わない奴を殺している——などという単純素朴な図式で見ていると、本当に重要なことを見落としてしまいかねない。

マフィアの利権抗争

手嶋 それでは、実際に事件を引き起

ト砲、果ては核関連物質まで、利幅の大きいブツなら何でも扱っていた。

先ほど、五〇〇〇万円程度の年収が必要だという指摘は、リトビネンコ氏の仕事を推測する一つの手がかりにもなるでしょう。

佐藤 リトビネンコ氏自身もこうしたビジネスに関わっていたと考えていいのではないのでしょうか。リトビネンコ氏は、ロシアの闇に精通した特異な経歴を持っています。旧ソ連軍中佐を経て、KGBに入り、組織犯罪(マフィア)を担当しています。武器密輸に十分なネットワークです。

また、こうした利権抗争の中で人が殺されることも珍しいことではない。

この筋立てのほうが、ロシア政府主犯説よりも論理整然的だと思います。

手嶋 そういふ密輸ディーラーであれば、ボロニウム210を入手する複数のルートがある。また、出所については、ロシアの核関連施設だけではなくウクライナなども可能性はあるでしょうね。ウクライナの最高検察庁の調査によると、ウクライナからは核弾頭を装着できる巡航ミサイルX55が一八基なくなっていることが分かっています。うち、一二基は中国やイランに渡ったことが確認されています。しかし、インドユーザーは不明なままです。そのほか六基は、どの国に渡ったのか。それすら分かっていません。

佐藤 北朝鮮やアルカイダがインドユーザーになるという危険も視野に入れて物事を考えなければなりません。

手嶋 実は、リトビネンコ氏がアルカイダと接触したという情報もあります。まだささやかな情報の段階ですが、中国から流出したのではないかと、中国

の影を読む情報機関もあります。リトビネンコ氏の交友関係から、彼のビジネスのコネクションは、ロシア、チェン、イタリア、中国と広がりつつある。世界中を震撼させる最悪のシナリオも想定しておくべきでしょう。

佐藤 日本はこの事件をきっかけに、ロシアと大量破壊兵器の不拡散に関する協議を進め、テロ組織にこうした武器が渡らない仕組みづくりを急がなければなりません。

チェチェン・ファクター

手嶋 一連の事件には常にチェチェンの影がちらつきます。チェチェンを巡っては多くの西側先進国は「ロシア政府の人権弾圧だ」と批判し、ロシア側は「チェチェンには、国際テロ組織が存在する」と反論している。一方で、日本はスタンスを決めかねて逡巡してきた。このチェチェンというキーワードをどう読み解けばいいでしょう。

佐藤 チェチェンというのは十八世紀

す。このため、チェチェンは急速に腐敗が進んでいった。

他方、本国に残ったチェチェン人とロシア帝国の平定から逃れようと中東に流れたチェチェン人が一九八五年のペレストロイカを境に交流できるようになったという側面があります。ところが、本国のチェチェン人が民族の独立を目指している一方、中東に逃れたチェチェン人は、アルカイダなどに近いイスラム原理主義・ワッハーブ過激派であるために「イスラム帝国を作る」と言い出して内紛が起きた。

手嶋 このため、チェチェン独立派としては、やむを得ず嫌いなはずのモスクワと手を組むようになったのですね。

ごろからロシア帝国と戦って、一八五九年にロシア帝国によって周辺地域と共に併合された。この時、ロシア帝国に平定されることを厭い、トルコやアラブ諸国に逃げたチェチェン人もいる。今、ロシア本国にいるチェチェン人はざっと一〇〇万人。トルコに一五〇万人、アラブ諸国全体に一〇〇万人くらいいます。長い歴史の中で、常にロシアにはひどい目に遭わされ続けてきた。しかし、それでも大してロシアをうらんだりしなかったんです。

今の泥沼の状態を引き起こすきっかけは、一九九一年、ソ連空軍の司令官でチェチェン人だったドゥダーエフがチェチェンに戻って、独立宣言をしたあたりから始まります。そもそも、ドゥダーエフは強硬なソ連邦維持派だった。このため、チェチェンの独立といっても、「ロシアとは対等だが、我々はソ連邦の一部だ」という理屈だったんです。イメージとすると、奥多摩の首長が「石原慎太郎都知事とは対等な

佐藤 一方のイスラム勢力側は、チェチェンに隣接するダゲスタン共和国の山奥にイスラム原理主義国家の創設を宣言しました。ここまできたら、ロシアも断固として平定に乗り出さざるを得ない。チェチェンには国際テロリズムが存在するんです。これは、人権弾圧を正当化するためにロシアがでっち上げている話ではありません。

また、チェチェンの平定のために、ロシアが送ったFSBのスタッフがお金の魅力に負けてチェチェンのマフィア組織に入ってしまった人が多いという事実も指摘しておきたい。FSBのネットワークはきわめて強固です。組織を辞めてからも互いに助け合ったり

しているんです。ロシアの保安機関の機密が保っているのかどうか。こんな中でポロニウムが流出したのですから、わたしは一抹も二抹も不安が残るのだと強調しているんです。

また、マフィアはチェチェン情勢を不安定なままにして、商売をしやすくする環境を担保する、そのために、人権派ジャーナリストや活動家に資金援助を行っているというのも公然の秘密です。このラインに、ベレゾフスキー氏、リトビネンコ氏が関係しているという人もいます。

手嶋 まさに、チェチェンには二重三重の複雑な構造がある。今回の事件を読み解くには、チェチェン問題の本質を理解しなければいけないことがよく分かります。

佐藤 それだけではない。日本がここから学ばなければならないのは、チェチェンのように領土保全の問題を神話化してしまつてはいけないということなのです。九〇年に入ってから、ロシ

アの領土問題をつぶさに見てきたつもりですが、当時、チェチェンはロシアから離脱しようと思えばできる状況にありました。ところが、離脱もせず、紛争地域にしておくことを放置してしまつたために、チェチェンは生き残るため、テロ組織と結びつかなければならないほどに追い詰められてしまつた。追い詰めたロシアの責任は重い。日本も北方領土を、「神話」にしてしまつてはいけないのです。

チェチェン・カードを切れば

北方領土問題は解決に向かう

手嶋 ところでこの秋、ニコライ・パトルシェフFSB長官が、二度も来日しています。ただし、全ロシア・バレーボール連盟会長としてですが。インテリジェンスの世界で、ひそかな話題を呼んでいます。バレーボール連盟会長の立場にありながら、バレーボールのことにさして関心を示さない一方、東アジアの数少ない主要な外交ブレイ

今回の一連の事件についてプーチン政権が手を染めたという憶測が広がっていることもあり、プーチン政権には国際的に逆風が吹いています。ロシアが苦境にあるのだとすれば、それこそ日本にとっては外交の追い風にする絶好のチャンスになるでしょう。麻生外相は先日、衆議院の委員会でも北方四島を面積で二つに分け、決着を図るという新しい構想を明らかにしました。

佐藤 日中両国の外務次官が〇五年五月から両国の中・長期的な課題について意見交換するために始めた会議は「日中総合政策対話」です。一方、領土問題を抱えるはずの日露間で、会議に「戦略」という名称を用いた、この

意味は大きい。「総合政策対話」よりレベルが上だということ。ロシア語でいう「戦略」とは、僕なりに解釈すれば「少なくとも、掴み合いのけんかはしない」というきわめて素晴らしい友好の印です。一定の成果を期待できるはず。もつと、踏み込んで言えば、北方四島についても返還するメニューも持ち合わせているはず。手嶋 この日中と日露の外相対話の距離は違う。なるほど。きわめて鋭い指摘でしょう。

佐藤 実は、二〇〇一年にロシアのテレビ局が北方領土の周辺海域にやってきて、花咲ガニを密漁している船長にインタビューしたことがあるんです。

ヤーといえるキーパーソンに次々と会っています。今では、日本にやつてきたロシアのバレーボール連盟には、バレーボールの話はしてはいけない——という新たな箴言が生まれました。

(笑)

佐藤 複数回、来ているというのが重要。日本としては、拉致と核実験問題について、北朝鮮に対して働きかけるようロシアに要請している。その中で来日を重ねるということは、ロシアとして前向きに検討する用意があるということなのでしょう。

手嶋 麻生外相は昨秋、ロシアのラブロフ外相と会談し、二〇〇三年に合意した「日露行動計画」に基づいて二国間関係を協議する外務次官級の「日ロ戦略対話」を開始することで合意しました。北朝鮮の核問題をめぐる六カ国協議の再開に向けて、日露両国が緊密に連携する方針も確認しています。実は今、水面下では日露外交は急速に新たな展開を見せています。

この映像を見たFSB幹部は腰を抜かした。密漁していたのは、チェチェンのテロ組織の幹部だったからです。北方領土周辺海域の海産物は、きわめて利幅が高い。その上、この地域は両国が主権を争っていることによって、ロシアの管理も日本の管理も十分には及んでいないのです。こういう地域は、チェチェン同様にテロの資金源となるのです。昨夏、根室沖でロシアが日本漁船を銃撃、船員一名が死亡した事件も、ロシアのテロに対する危機感を反映した面があります。

このような悲劇の再発を防止するためにも、北方領土問題を解決して四島の管理をきちんとすることがテロ対策

で有効だという切り口で平和条約を加
速化すべきです。

手嶋 事態の深刻さに気付いているた
めか、暗殺事件後、日本は不気味なほ
どに沈黙を守っています。「戦略対話」
で日本は新たな外交攻勢に出るべきで
しょう。これまで、ロシアのチェチェン
政策についての日本のスタンスは、い
まひとつ定まりませんでした。ラス
プーチンならどんな布石を打ちますか。
佐藤 二つです。

一点目は、ロシアの領土保全を日本
は断固支持する。ロシアの国家体制の
強化と領土保全。チェチェンをめぐる
領土保全は断固保全するといえはいい。
二点目は、北方四島は係争地域であ
ることを再確認する。

多くの人が忘れていると思いますが、
一九九八年に日本とロシアは、国境画
定委員会を作ったんです。裏返せば、
「国境がない」ということを、両国が
合意しているということです。だから
領土保全の問題は生じない。どっちの

領土なのか決まっていない係争地域な
のですから。そして、チェチェンに関
するロシアの領土保全については、日
本はサポートすると。この論理からい
けば、チェチェンと北方領土は全く異
なる問題ということになる。

手嶋 そうですね。そして、このポロ
ニウムなどの大量破壊兵器が北朝鮮な
どに渡らないための仕組みづくりに向
けて、日露が連携する必要があるでし
ょう。また、北朝鮮の核実験について
も、阻止するための協力者となるよう
ことを運ぶべきでしょう。これまで使
っていないかったロシアというカードを
存分に切って、一気に、解決に向かわ
せるべきです。

佐藤 日本は急がば回れで、チェチェ
ンの南側にあるグルジアの支援をした
らどうでしょうか。この国は、二十一
世紀になってから農業人口が増えると
いう世界で唯一の国です。外国からの
支援も不十分で社会が不安定です。今、
チェチェンとグルジアの間にあるパン

キシ渓谷には、アルカイダのキャンプ
ができています。そして、グルジアでは
アルカイダの影響が日増しに強まって
います。日本は今、グルジアに大使館
がないのですが、この国を安定させる
ことに努めれば、ロシアにとって大変
な援軍になる。この地域に政府開発援
助（ODA）を行えばいい。食品産業
分野での支援などはどうでしょうか。

ロシアの南側からの脅威に対し、安
全保障をきちんとしてくれる国と手を
結んだほうが得策だとロシアに思わせ
ればいい。

手嶋 ここ数年間、日本外交は迷走を
続けてきました。しかし、二〇〇六年、
新政権発足直後、安倍首相は中国と韓
国を訪問し、久々に首脳会談を行うこ
とができました。そして、今年、日本
は北方の大国に向けて、新たに針路を
定める、まさにその時がきたようです。
二〇〇七年、日露外交はまさに目の離
せない新たな展開を見せることになる
でしょう。